

因果帰属の方向性と学習遂行との 関連について

小林 和久

Relations between Causal Attribution and Learning Performance

KOBAYASHI, Kazuhisa

Abstract

About causal attribution theories, Fritz Heider developed a model which explains success and failure from the factors of 'ability', 'effort', 'luck' and 'task difficulty'.

Weiner's model, which based on the foundations established by Fritz Heider, deals with the explanations we arrive at for success and failure of people on particular tasks. He assumes two dimensions; one is internal/external dimension, the other is temporary/stable dimension. The temporary/stable dimension is assumed to be most important to us in forming expectancies, or prediction of how someone will do in the future. The second dimension of causal attribution is believed to relate primarily to the rewards or punishments that follow a performance.

This study examines relations between the I·P&C scale which measures attribution tendencies (internal, powerful other's and chance control), the length of examination time and the examination scores of university students.

Results suggests that attributional directions contrary to luck, chance, opportunity enhance learning performance, and attributions to luck et al. reduce learning performance.

要約

因果帰属に関して、Heider, Fの「努力」・「能力」・「運」・「課題の困難度」に分類する理論やWeiner, B.の内的・帰属の制御の所在と安定性を軸にした分類が知られている。これら因果帰属が、行動の結果を知った後の行動に影響を与えることが知られている。本研究では、因果帰属の方向性と学習の結果である試験結果等とどのような関係があるかを検証しようとするものである。

本研究⁽¹⁾では、因果帰属の方向性を測定する尺度であるI・P&C尺度、試験得点、試験に取組んだ時間を測定した。その結果、運や偶然に原因を求めないことが学習遂行を促進する可能性を示唆している。これに対して、物事の成否が運や偶然に左右されるといった認知が学習遂行を阻害している可能性を示唆しているとみることができる。

キーワード

因果帰属 (causal attribution) / 内的帰属 (internal attribution)
 外的帰属 (external attribution) / 学習遂行 (learning performance)
 大学生 (university student)

はじめに

原因帰属に関して、成功と失敗に関する帰属としては、Heider, F. (1958) が提唱した能力、努力、困難度、運の4つの面が知られている。また、Weiner, B. (1971) らは4つの要因を内的帰属・外的帰属の制御の所在と安定性との関連で分類している。これらの研究から、帰属のあり方が成功・失敗事態の後の成功期待に影響することや、内的帰属は情緒反応を拡大することなどが知られている。

帰属過程の観点から学生の言動をみると、試験前には「どこを勉強したらよいのか分らない」とか「何が重要なのか分らない」といった外的帰属と解釈される発言が聞かれる。また、試験後によくない結果を知った場合は、「勉強の仕方が分らなかった」といった外的帰属と解釈される発言が聞かれる一方で、よい結果を知った場合は「一生懸命勉強したから」といった内的帰属と解釈される発言も聞かれる。このような結果を予測したり、結果を知らされた時点での帰属の方向性に加えて、日常の学習過程での帰属の方向性が学習遂行を遂行したり阻害していることも考えられる。本研究は、I・P&C尺度得点と、試験に取り組んだ時間、試験の成績の関連を捉え、帰属過程が学習遂行に及ぼす影響を確かめようとするものである。

1. 問題の所在

私たちは、日々多くの情報に接し、また数多くの出来事に遭遇しているが、自分なりにそれらの情報や出来事を解釈し説明しながら生活している。特に自分(たち)の行動からもたらされる出来事の成功・失敗に関しては、かなり多くの場合、なぜうまく行ったのか?、なぜ失敗したのか? を考えていると推測される。こうした行動は広範な範囲の日常生活で行われており、「因果関係の認知を通じて環境内に生じる現象や人間の行動を解釈する過程」を一般に「帰属過程」(あるいは、「帰属」という。この帰属過程は、学校教育現場において、児童・生徒・学生や教員はもちろんのこと、児童・生徒・学生の父母、教育行政関係者も行っている訳であるが、本稿では、児童・生徒・学生(以下学生と総称する)に焦点をあてて考察して行く。

達成行動の結果を説明する原因帰属に関して前述したように、成功と失敗に関する帰属としては、Heider, F. (1958) が提唱した能力、努力、困難度、運の4要因が知られている。Rotter, J. B. (1966) は、強化の統制に個人差があることを指摘した。すなわちある人は運任せが一番よい結果を得ると思込み(外部統制型)、別の人たちは自分がベストを尽くせばよい結果を得ると信じる傾向(内部統制型)があると考えた。また、Weiner et al., (1971) らはHeider, F.の4要因をRotter, J.B.の説を入れて、内的帰属・外的帰属の制御の所在と安

定性との関連で分類している(表1)。大坪靖直(1994)は、Weinerの帰属理論を以下のように記している。

「物事の原因には実にさまざまなものがある。Weiner, B., et al., (1972)の帰属理論は、これら多種多様な原因を分類する理論であり、帰属に関する研究知見を一般化するのに有効である。統制の所在とは、その原因が自分に関するもの(内的原因)か、それとも環境に関するもの(外的原因)かを分類する基準である。安定性とは、時間や状況によって変化しにくいもの(安定した原因)か、変化しやすいもの(不安定な原因)かの基準である。私たちは、自尊心を高揚(保護)するために、成功の原因は内的な原因に、失敗の原因は外的な原因に帰属しやすい。しかし、外的なものや不安定なものは自分でコントロールすることが難しいことから、物事の原因をこういったタイプの原因にばかり”帰属しやすい人は、自己効力感が低くなる傾向がある。」

達成動機の高低と帰属過程に関しては、Atkinson, J. W. (1974)などの研究から、達成動機の高低により、成功・失敗の原因帰属に違いがあることが知られている。即ち、達成動機の高い者は、成功を‘能力’に、失敗を‘努力’不足に帰属するのに対して、達成動機の低い者は、成功を‘運’のよさや‘課題’

の易しさに、失敗を‘能力’不足に帰属する傾向がある。これらの研究から、帰属のあり方が成功・失敗事態の後の成功期待に影響することや、内的帰属は情緒反応を拡大することなどが知られている。

ところで、学校教育場面では、教員が学生に対してさまざまなかたちでフィードバックを行っている。それらは、試験の点数や通知表の評価のようにはっきりと点数・符号で示されるものもあれば、日常的な教育場面での教員が学生に対して行う声掛けや非言語的な動作も含まれる。教員からフィードバックを受けた学生は、さまざまな感情を抱く。

例えば、試験の答案を返却され、高い点数を取れた学生は「うれしい」、「やった」といった感情を持つであろうし、低い点数であった者は「残念」、「仕方ない」といった感情を持つであろう(ただし、高い点数を取ったから「うれしい」、低い点数を取ったから「残念」といったような反応のみが生起すると考えるのは一面的過ぎて、個人により反応が異なることも考慮すべきである)。

なぜ、さまざまな反応が生じるかであるが、心理学的観点からみると、人々異なる‘帰属’を行っているからである。また、コミットメントのレベルやその時々感情も

表1 Weinerの帰属理論

		不安定/安定の次元	
		不安定	安定
内的/外的の次元	内的	努力 気分 疲労 (短期的な努力、体調)	能力 知性 身体的特徴 (性格、長期的な努力)
	外的	運 偶然 機会(天候)	課題の困難度 周囲の妨げ (教え方、友人など)

()内は、大坪(1994)があげた項目

関係していると推察される。

般に、試験で成功あるいは失敗した後に、原因をどう認知するかによってその後の学習活動に違いが生じることが予想される。特に、失敗時に、‘努力’不足に帰属した場合は、自分のその後の取り組み次第で挽回できると思っているので、学習意欲を失うことなく、継続して課題に取り組むことが予想される。また、‘努力’に帰属した場合は、それまでの行動が無駄ではなかったことを知り、行動が強化されて、より 層の努力を積むことが予想される。

こうした点に関して、Diener & Dweck (1978) は、生徒の帰属の特徴として、「達成傾向」と「学習性無力感傾向」の2つの傾向があることを示唆している。まず「達成傾向」では、成功を内的、特に能力に帰属し、失敗を外的要因または努力の欠如に帰属する。それとは対照的に、「学習性無力感傾向」では失敗を説明するのに安定的帰属、特に特に能力の欠如に帰属し、成功を外的帰属する傾向がある。

以上のように、‘帰属’と学習意欲との関係が知られている。典型的にはこのような関係は十分に想定できるが、個人差も考慮に入れるべきであろう。Heider, F. のあげた4つの要因別に学習の行動・意欲との関係を考えてみたい。

‘努力’に関しては、失敗時に‘努力’不足に原因があると感じていながらも、学習意欲が湧かず、従来通りの取組みを続けたり、あるいは、努力を放棄し以前より学習に取り込もうとしない者もいることが想定される。

また、‘努力’をして、本人にとってある程度満足の行く成果を出したことで(自分の有能感を一時的であれ確認できた)、その後の‘努力’をやめてしまう者がいることも想定

できる。

‘能力’に関しては、‘能力’に帰属し成功した場合は、一般的にはその後も同じ水準があるいは今まで以上に学習に取り組むことが予想される。しかし上述したように、自分の能力を確認できたことが一定の満足感をもたらし、それ以降の学習を減少させる者があることも想定される。‘能力’に帰属し失敗した場合は、一般的にはその後の学習に対する意欲は減少すると考えられるが、‘能力’が可変的であると考えているならば、必ずしも意欲は低下するとは限らない。

‘課題’に関しては、‘課題の易しさ’に帰属し成功した場合には、表面上は、その後の学習には余り影響を及ぼすとは考えられないが、これまでの‘努力’や‘能力’が確認できたことになり、その後の学習を促進させる可能性と同時に、それとは反対に、課題は挑戦すべき価値がないと考え、その後の学習を停滞・減少させる可能性もある。対照的に、まれなケースであろうが、‘課題の易しさ’に帰属しながら失敗した場合には、かなり自分自身に対する‘能力’評価を低下させることが想定される。一方、‘課題の難しさ’に帰属し失敗した場合には、次に同じレベルの課題には取り組まないと典型的には予想されるが、一層努力して次は同じレベルの課題を達成しようとする者もいるであろう。

一般に‘運’の良し悪しへの帰属は、その後の行動に影響を及ぼさず、同一・同様な課題に臆せず再挑戦すると予測される。しかし、運への帰属が、学習性無力感と結びついている場合はこの限りではない。

このように従来の研究から、帰属とその後の行動について典型的なパターンが知られているが、個人差を考慮に入れると、必ずしも典型的なパターンのみが生じる訳ではないことが分かる。

次に学習のプロセスの中での、帰属過程について考えてみる。

桜井茂男(2004)は、『知的好奇心』と『有能さへの欲求』が自ら学ぶ意欲の源であるとし、「自ら学ぶ意欲の発現プロセス」を提唱した。このプロセスは大きく3つの段階(‘欲求’ ‘学習行動’ ‘認知・感情’)に区分される。この意欲の発現プロセス中の学習行動の段階においても‘帰属過程’が働いていることが想定できる。

まず、情報収集(=問題を解決するために、あるいは問題を見いだすために多様な情報を収集する行動)段階においては、‘能力’がある・‘努力’できる(できた)・‘課題’は達成可能であると認識する方が、‘能力’が低い/ない・‘課題’は難しい(または、易し過ぎる)と認識するよりも、挑戦は促進されると推測される。

次に挑戦(=現在よりも少しでも難しい問題に挑戦しようという行動)段階についてであるが、挑戦しようとする場合と挑戦を回避しようとする場合に分けて考えてみる。まず、挑戦しようとする場合であるが、‘能力’がある・‘努力’できる・‘課題’は達成可能であると認識する方が、‘能力’がない・‘努力’しようとは思わない(できるかどうかは別の問題として)・‘課題’はむずかしすぎると認識するよりも、挑戦は促進されると推測される。一方、挑戦を回避しようとする場合は、‘能力’がない・‘努力’しようとは思わない(できるかどうかは別の問題として)・‘課題’が難しい・‘運’がないと認識する方が、‘能力’がある・‘努力’しよう・‘課題’は達成可能である・‘運’があると思うと認識するよりも、挑戦は抑制されると推測される。

3番目の独立達成(=自分の力で問題を解こ

うという行動)をしようとする場合は、‘能力’はある・‘努力’をしようと思う・‘運’は潜在的であれ、あると思う・‘課題’は達成可能であると認識している者の方が、‘能力’はない・‘努力’しようとは思わない・‘運’はない・‘課題’は達成可能ではないと認識している者よりも、独立達成行動が促進されると推測される。

(一方、独立達成を回避しようとする場合は、‘能力’はない・‘努力’しない・‘運’は潜在的であれ悪い・‘課題’は達成できないと認識している者の方が、‘能力’はある・‘努力’しよう・‘運’はよいと認識している者の方よりも独立達成は抑制されると推測される。)

このように結果の良し悪しとその後の行動に影響を及ぼすだけではなく、結果を漠然とあれ予測する際にも帰属過程が働いていると考えることができる。

本研究では、達成行動の指標として、試験に取り組んだ時間(40分あるいは60分)と、学習の結果である試験の点数(中間試験および期末試験の点数)を設定し、帰属の方向性との関係を捉えようとするものである。

2. 方法

(1) 調査対象者：大学1・2年生男女39名

(2) 測度：

1. I・P&C尺度⁽²⁾：原因帰属の方向性の測定
2. 科目試験得点：ある科目の中間試験・期末試験の合計点
3. 試験提出時刻：開始後40分、60分

(3) 手続き：I・P&C尺度は、通常の授業時間中に施行した。科目の試験得点は、中間試験と期末試験の合計点である(中間試験1に対して期末試験2の重みづけが加えられており150点が満点であ

る)。提出時刻は、60分間の試験制限時間中の開始後40分時点での途中提出か、60分終了時点での提出のいずれかを選択させた。

3. 結果

表2にI・P&C各尺度の得点群別(高(H)・中(M)・低(L)群)の試験得点平均点・標準偏差・データ数を示した。

なお、高得点群は平均点よりも1SD以上高い得点を得た者、低得点群は平均よりも1SD以下の得点を得た者からなる。

表2 I・P&C各尺度得点群別の試験得点平均点

	H群	M群	L群
I尺度	72.00 (14.45) N=7	70.70 (30.06) N=27	61.00 (21.43) N=5
P尺度	78.25 (26.64) N=12	67.48 (27.07) N=23	56.75 (10.67) N=4
C尺度	69.75 (25.67) N=8	68.25 (25.80) N=24	74.57 (33.86) N=7

得点は150点満点()内は標準偏差

表3 提出時刻別の試験得点平均点

40分後提出群	63.40 (22.67)
60分後提出群	90.67 (29.51)

()内は標準偏差

表4 I・P&C各尺度H/L群の提出時刻別試験得点平均点

	40分後提出	60分後提出
I尺度H群	0.0 (0.0)	81.0 (5.7)
I尺度L群	61.0 (21.4)	68.4 (15.8)
P尺度H群	65.7 (17.3)	95.8 (29.0)
P尺度L群	56.8 (10.6)	0.0 (0.0)
C尺度H群	60.0 (22.3)	86.0 (26.0)
C尺度L群	60.2 (22.2)	110.5 (36.1)

()内は標準偏差

表3には、提出時刻別の試験得点平均点・標準偏差を示した。両群間に有意な差異が認められる。

表4には、I・P&C各尺度H/L群の提出時刻別の試験得点平均点・標準偏差を示した。C尺度H-L群に有意な差異が認められる。なお、他の尺度群間には有意な差異は認められない。

4. 考察

はじめにI・P&C尺度について述べる。I・P&C尺度は、一般にP尺度値とC尺度値の相関が高く、P尺度値とI尺度値、C尺度値とI尺度値との相関は低い、本研究では、P尺度値とC尺度値の相関係数は $R = 0.50$ 、P尺度値とI尺度値の相関係数は $R = 0.19$ 、C尺度値とI尺度値の相関係数は $R = -0.10$ であった。なお、筆者が別の男女大学生155名を対象に施行した際の結果は、P尺度値とC尺度値の相関係数は $R = 0.46$ 、P尺度値とI尺度値の相関係数は $R = 0.12$ 、C尺度値とI尺度値の相関係数は $R = -0.01$ であり、概ね同様の結果であった。このことから本研究の被験者が帰属に関して一般的な傾向を持った者の集団であるとみられる。

表2に示したI・P&C尺度別の試験得点各群の平均点には有意な差異は認められないが、I・P尺度値と試験得点が正の相関を示すのに対して、C尺度値と試験得点は負の相関を示している。

表3からは、試験の制限時間である60分終了時点で提出した群の方が、40分経過時点で提出した群に比べてかなり成績がよいことが確認された。

60分取り組んだ者は、最後まで取り組むことでよい結果が得られると思い行動したと推測される。

しかしながら、以下のような理由も考えられる。

- ・ 最後(制限時間いっぱい)まで取り組みれば、その努力が評価されると期待している。
- ・ 制限時間いっぱい取り組むことが日常的な行動である(過程をより重視する)
- ・ 試験を受けること、あるいはその科目にコミットがある
- ・ 一緒に受けている友人が取り組んでいるから。

一方で、40分で提出した群は、

- ・ 出来たと思う。
 - ・ 40分あれば十分だ。
 - ・ あきらめた(これ以上時間をかけて取り組んでも、これより成果は上げられないであろう)。
 - ・ この科目にコミットがない。
 - ・ 大学・学業全般にコミットがない。
- 等の理由が推測される。

表4からは、統計的には60分提出者のC尺度H-L群間に有意な差異がみいだされた。C尺度L群、すなわち、ものごとの成否は運や偶然によっては左右されるものではないと

考える傾向が強い者のグループが最も成績がよい。最後まで解答を続けようと努め結果としても高い成績を得ていることが分かる。I尺度値H群に40分経過時の提出者がいないことは、I尺度値が高い者は一定の成功体験があり統制感も高く最後まで取り組むことでよい結果を得ることができると予期して60分間試験問題に取り組んだと解釈できる。

60分提出者をみると、有意差はみられないが平均得点の高い順に、C尺度L群・P尺度H群・I尺度H群であった。帰属の傾向に関しては、上述したようにC尺度値とI尺度値の相関係数は $R = -0.10$ であり、C尺度L群とI尺度H群はやや類似性のある集団であることが推測される。これらの群の共通性は、統制感があるということである。しかし、前述したようにP尺度値は一般にC尺度値と相関が高いので、P尺度H群は、C尺度L群およびI尺度H群とは質的に異なる集団であると考えられる。P尺度H群は、ものごとの成否は強力な他者によって左右されると思っており、統制感といった観点に立てば、統制感は低い群である。考えられることは、60分取り組むことが、「強力な他者」により承認されると思い(いわば受動的な達成動機)問題に向

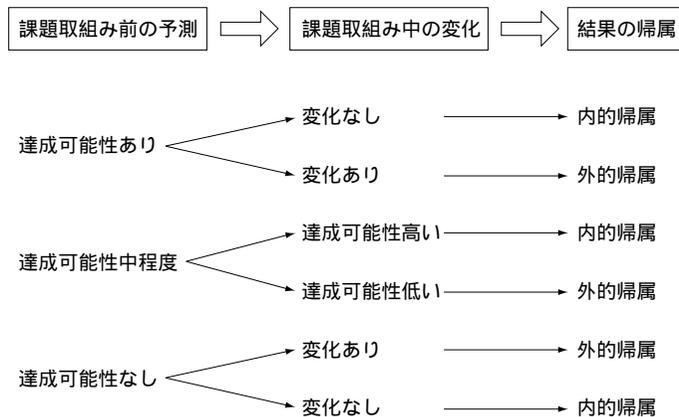


図1 達成可能性と帰属の方向性

い合い、一定の成果を得たということである
うか。

これらのことから、運や偶然に原因を求め
ないことや自己による統制感が学習遂行帰属
傾向を促進する可能性を示唆している。これ
に対して、物事の成否が運や偶然に左右され
るといった認知が学習遂行を阻害している可
能性を示唆しているとみることができる。な
お、課題の達成可能性と帰属の方向性につい
ては、典型的なパターンとしては図1のよう
に想定できるが、今後このモデルを使った検
証が必要である。

(参考文献)

- 蘭千壽・外山みどり (1991). 『帰属過程の心
理学』ナカニシヤ出版
- Medway, FJ. & Cafferty, T.P.(Eds.) (1992). *Social
Psychology: A School Psychology Perspective*.
Lawrence Erlbaum . (田中宏二・淵上克義・
越良子・谷口弘一〔編訳〕(2005). 『学校心
理学 社会心理学的パースペクティブ』北大
路書房)
- Shaver, K.G. (1975). *An Introduction to Attribu-
tion Processes*. Winthrop Publishers. (稲松信
雄・生熊譲二〔訳〕 1981 『帰属過程入門 対
人行動の理解と予測』誠信書房)

(引用文献)

- Atkinson, J.W. (1974). The mainsprings of
achievement-oriented activity. In J.W. Atkin-
son and J.O. Raynor, eds. *Personality, motiva-
tion, and achievement*. Washington, DC: Win-
son.
- Dweck, .C.S. (1975). The role of expectations and
attribution in the alleviation of learned help-
lessness. *Journal of Personality and Social*

Psychology, 31, 674-685.

- Heider, F., (1958). *The psychology of interperson-
al relations*. John Wiley & Sons (大橋正夫〔訳〕
1978 対人関係の心理学 誠信書房)
- Levenson, H. (1981). Differentiating among inter-
nality, powerful others, and chance. In
H.M.Lefcourt (ed.), *Research with the locus of
control construct*. Academic Press.
- 中村陽吉 (1983). 『対人場面の心理』東京
大学出版会
- 大坪靖直 (1994). 『ワイナーの帰属理論』
藤原武弘・高橋超 (編) チャートで知る社
会心理学 福村出版 p.44.
- Rotter, J.B. (1966). Generalized expectancies for
internal vs. external control of reinforcement.
Psychological Monograph., 80(1, Whole
No.609).
- 桜井茂男 (2004). 『やる気を高める』桜井
茂男 (編) たのしく学べる最新教育心理学
図書文化 pp.41-59.
- Weiner, B. (1985). An attributional theory of
achievement motivation and emotion. *Psycho-
logical Review*, 92, 548-573.
- Weiner, B. (1995). *Social Motivation, Justice, and
the Moral Emotions: An Attributional Ap-
proach by Bernard Weiner*. Erlbaum Associates,
Inc. (速水敏彦・唐沢かおり〔監訳〕2007 社会的
動機づけの心理学 北大路書房)
- Weiner (2006). *Social Motivatdon, Justice, and
the Moral Emotions: An Attributional Approach
by Benard Weiner*. Lawrence
- Weiner B., Friezer, I.H., Kukla., A., Reed., I.,
Rest, S., & Rosenbaum, R.M.(1971). *Perceiving
the success and failure*. Morristown, Nj: Gener-
al Learning Press.

注

(1) 本稿は、筆者が日本心理学会第72回大会(2008年9月20日)において『原因帰属の方向性と学習遂行との関連』(日本心理学会第72回大会発表論文集P1315)としてポスター発表したものをもとに、加筆したものである。

(2) Levenson, H.(1981)は、Rotterの外部制御型を、他者による統制(Powerful other's control)と運・偶然(chance control)による統制を分けて、内部制御型(Internal control)を加え、I・P&C尺度を作成した。日本では、中村陽吉(1983)が翻訳した。

I・P&C尺度の質問項目は以下のとおりである。

評定は、+3(強く賛成)~-3(強く不同意)の六段階で評定する(0=どちらとも言えないは設定しない)

I次元の項目は、1, 4, 5, 9, 18, 19, 21, 23

P次元の項目は、3, 8, 11, 13, 15, 17, 20,

22

C次元の項目は、2, 6, 7, 10, 12, 14, 16, 24である。

I・P&C尺度(内部制御-外部制御型尺度)

1. 私がリーダーになれるかなれないかは、私の能力次第というのが普通だろう。
2. 私の人生は、たいていは偶然の出来事に左右されていると思う。
3. 私が生活の中で体験することは、たいていは誰か影響力の強い人たちによって決められたことだと思う。
4. 車の事故に巻き込まれるか否かは、多くの場合ドライバーの腕次第だと思う。
5. 私は仕事のプランを立てたら、たいていはそれを実現させる自信がある。
6. 不運な出来事に見舞われたら、自分の個人的利益を守り通せる見込みほまずないだろう。
7. 私の思い通りになったときは、いつも運が良かったのだと思う。
8. 私はそんなに能力に欠けているとは思わないが、それでも、リーダーシップの責任を負う立場に立つには、権力の座にある人の力に頼らざるを得ない。
9. 私が何人の友人を持ちうるかは、私ほどの程度魅力的な人間であるかにかかっていると思う。
10. 人生における出来事は、なるようになるしかないと思うことが多い。
11. 私の人生は、専ら、影響力の強い人によって左右されているように思う。
12. 車の事故に巻き込まれるか否かは、たいていは運次第だと思う。
13. 私と同じような立場の人たちは、強力な圧力集団の利害と衝突したら、とても自分たちの利益を守り通すことはできないと思う。
14. 多くのことは運次第で風向きが変わるものだから、あまり先のことまで計画するのは賢明なことではないだろう。
15. なにかの思いを遂げたいのなら、自分より上の立場にある人たちに気に入られねばならない。
16. リーダーになれるかどうかは、ちょうど運よく、うまい時期に、うまい立場にいるかどうかにかかっていると思う。
17. 偉い人たちのご構嫌を損ねると、たぶん、友達もなかなかできなくなるだろう。
18. 人生になにが起るか、自分の力でなんとか決めていくことができると思う。
19. たいていの場合は、私は自分の個人的利益を自分の力で守り通せると思う。
20. 私が車の事故に巻き込まれるか否かは、

- ほかのドライバ たちの腕次第だと思う。
21. 思い通りの結果になるのは、たいてい、私
がそのために殊のほか努力をしたときだ
と思う。
22. 私に影響力を持つ人たちの気に入らない
ような計画は、いくら私が計画しても、そ
れを実現させることはできないだろう。
23. 私の人生は、私自身の日常の行動によっ
て決まるだろう。
24. 私が多くの友人に恵まれるか否かは、専
ら、運次第だと思う。